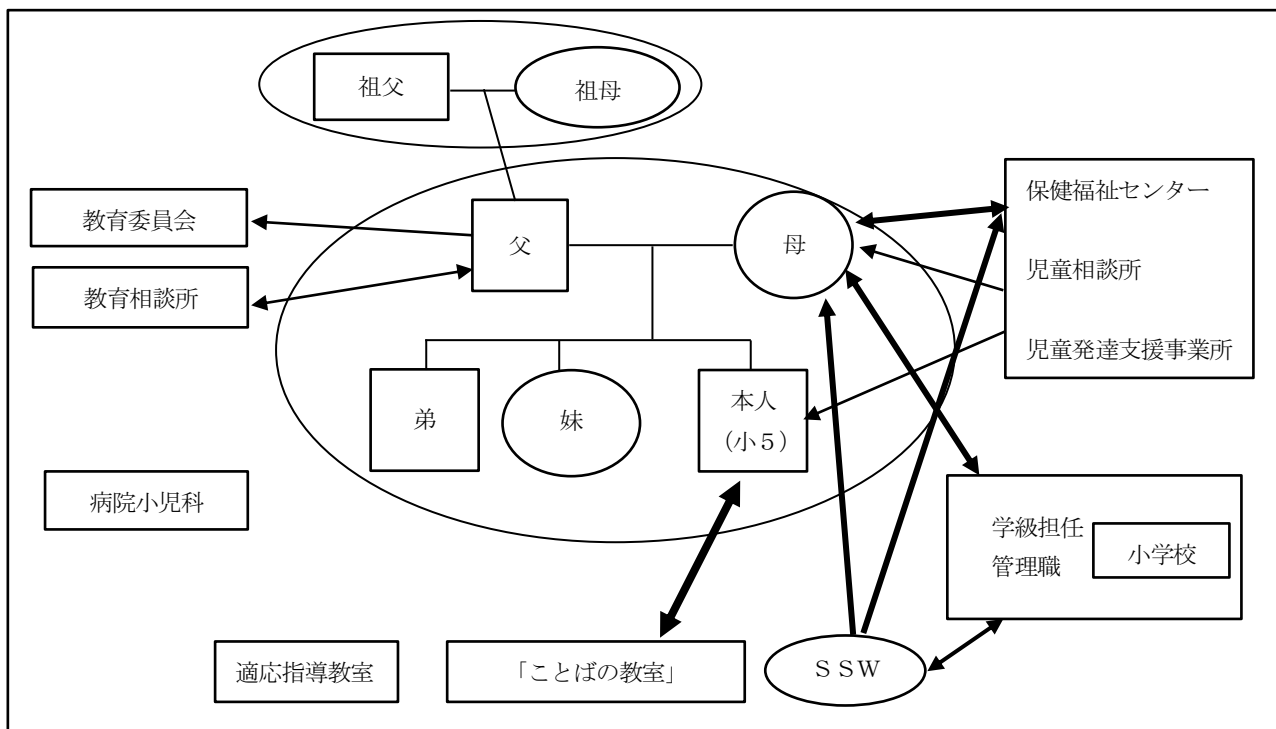


関係機関と連携して不登校の児童を支援したケース



1 気になる状況

- 当該児童について、小学校入学時に、就学指導委員会で児童相談所から場面緘黙であることが伝えられていた。
- 当該児童は、中学年時に、不登校傾向であったが、長期に及ぶことはなく、その後は学校生活を楽しくしているように見えていた。
- 当該児童は、第5学年の5月以降不登校になっている。
- 不登校になった当初、朝起きることができず不規則な生活であったが、両親が登校刺激をやめたところ、早起きができるようになり、規則正しい生活を送っている。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該児童は、乳幼児検診時から、運動発達面、精神発達面、言語発達面、知能発達面において、経過観察となっており、幼児期から児童相談所で定期的に検査を行っている。
- 当該児童は、児童相談所の検査において自閉的傾向の疑いが見受けられたが、保護者へは伝えられていない。
- 当該児童は、限られた人としてしかコミュニケーションをとることができず、特に大人との会話が難しい。
- 当該児童には、同級生に1名、低学年に2名仲よくしている友人がいる。
- 当該児童の両親は共働きで、当該児童は、平日の日中、一人でゲーム等しながら自宅にいる。
- 当該児童は、土日に祖父母宅に出かけ、祖父母宅の近くに住んでいる低学年の友人と遊ぶことが多い。
- 当該児童は、就学前から週1回「ことばの教室」に通っており、通級を楽しみにしている。
- 「ことばの教室」でも場面緘黙の状況が見られた。

(2) 学校との情報共有の状況

- S S Wの働きかけにより、学校は保護者の了承を得て保健福祉センターと連携を図り、学級担任が保護者同席のもと、保健師から就学前の状況を聞くことができた。

3 ケース会議の状況

- ケース会議 1回
 - ・参加者 管理職、学級担任、S S W
 - ・内容 当該児童の登校に向けて学校ができること（保健室、特別支援教室、図書室、空き教室を利用した別室登校）及び、保健福祉センターと児童相談所との連携の在り方について確認するとともに、将来的には医療との連携も視野に入れることを確認した。

4 プランニング

- 学校は、家庭訪問を実施し、当該児童との関係が構築できるよう働きかける。
- 学校は、保護者の悩みを傾聴し、不安を軽減できるように受け止める。
- S S Wは、関係機関と連携し、当該児童の特性に合った居場所づくりに努め、学校、自宅、祖父母宅以外に当該児童が安心できる場所を検討する。

ケース会議の際に、関係機関の役割を明確にしたことにより、具体的な取組を推進することができ、当該児童や保護者への支援を推進することができた。

5 関係機関との連携

- 保健福祉センター：相談、児童相談所への検査依頼
- 児童相談所：発達検査
- 教育相談所：保護者面談
- 適応指導教室：通級の検討
- 病院小児科：医学的見地からの当該児童の把握
- S S W：全体の把握と調整、母親支援

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

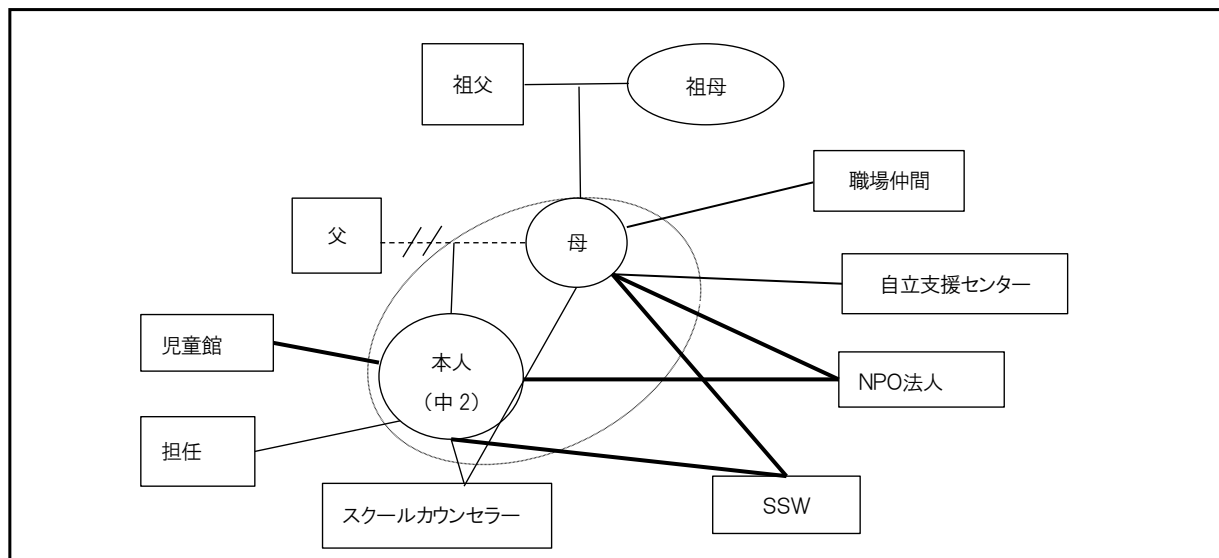
<成果>

- S S Wを中心に、保護者はもとより、保健福祉センターなど関係機関と連携する体制を構築したことにより、当該児童の居場所づくりを進めるとともに、保護者の悩みについて共通理解を図ることができた。

<課題>

- 保護者は、当該児童への対応について、有効な方策が見つからないことに不安を抱えていることから、保護者に対する支援の在り方を検討する必要がある。

生徒の特技と社会資源をつなげることで自己肯定感を高めたケース



1 気になる状況

- 当該生徒は、中学校第2学年に在籍しており、小学校第4学年の途中から、学校行事以外は、ほとんど学校へ登校できなくなり、状況は小学校を卒業するまで続いた。
- 第5学年時は、適応指導教室に通級していたが、第6学年に進級する際、当該生徒の希望により通級をやめた。
- 中学校では入学式のみ出席し、その後は不登校の状況が続いていた。
- 以前関わっていたSCから学習支援などの社会資源が使えないかとSSWに相談があったが、現在のSCが、今は登校を促している時期で社会資源を使う段階ではないという見解をもっていただけ見送られた。
- 2か月後、NPO法人の学習支援に関する情報を入手した母親から、学習支援を利用したいという要望があったことから、SSWによる当該生徒への支援が始まった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒は、同年齢との関わりがあまり得意ではなく、仲間同士のトラブルが不登校の要因のようであったが、当該生徒自身、よく分かっていない状況である。
- 当該生徒は、不登校の初期段階に、成長期による心身のアンバランスや両親の離婚の影響もあり、友達に対する暴言や母親に対する反抗が見られたが、現在は、感情の起伏も少なく、落ち着いた生活を送っている。
- 当該生徒は、手作りのアクセサリやネイルなどに興味があり、家で過ごす時間の多くを作品作りに費やしており、当該生徒が作る作品の完成度は高い。
- 当該生徒は、幼少期にスポーツを習っていたこともあり、体を動かすことを好む。
- 当該生徒は、不登校の状況が続いているため、学習内容の定着に課題がある。
- 当該生徒は、毎週土曜日に地域の児童館で一日を過ごしている。幼少時から通い慣れている場所であり、当該生徒にとって心の拠り所となっている。
- 当該生徒の両親は、第4学年時に離婚した。
- 当該生徒は、母親と2人暮らしであり、母親はフルタイムで働いているが、昼休みに当該生徒の様子を確認するために帰宅している。
- 母親は、当該生徒が不登校になった頃は、登校させようと必死であったが、第5、6学年の学級担任との関わりに苦手意識が募り、登校させることへの執着が薄れていった。
- 母親は、現在、SCとの定期的な面談を重ね、子育てに関する他人からの評価を気にせず、当該生徒の本質を見つめることができるようになり、親子間の葛藤も薄れている。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級担任及びSSWが定期的に家庭訪問を行い、当該生徒の状況の把握や当該生徒が作った作品を見せてもらい、作り方を教えてもらうなど、当該生徒が自信をもち、得意な面が発揮されるような支援を行っている。またSSWは、学級担任や当該中学校担当のSCと情報交換を行っている。

3 ケース会議の状況

- 支援等の状況を踏まえ、必要であれば開催する。

4 プランニング

<学校>

- 週1回、放課後に学習プリントを取りに来させることで、学校への帰属感を途切らせず、当該生徒がいつでも登校できるよう体制等を整備すること。また、当該生徒の状況に応じて、その場でプリントに取り組ませるなど、当該生徒との信頼関係を構築すること。
- 月に1回程度、SCとの面談を継続すること。現在は、母親との面談が行われているが、当該生徒の希望に応じていつでもSCと面談できるよう、心理面でのサポートを受けられる体制を整備すること。

<SSW、社会資源の活用>

- 母子家庭等が対象となる学習支援を利用できるよう、福祉の窓口を紹介し、手続きした上で、実施主体のNPO法人が支援を開始する。個別支援のため、当該生徒の状況に応じた学習が期待できる。
- 当該生徒を「社会資源を活用し、支援を受ける人」と捉えるのではなく、手作り作品を周りに紹介することで、「地域に発信し働き掛ける人」となり得る発想を取り入れる。
 - ・具体的な取組として
 - ①NPO法人運営の店舗において、当該生徒の作品展を開催する。地域住民からの評価を受けることで他者とのつながりを感じさせるとともに、自己肯定感を高めることができる。また、店の売り上げにも貢献できる。
 - ②学習支援の交流会において、当該生徒を講師としてアクセサリーの手作り体験の場を設定することにより、仲間づくりの機会をつくることができる。
 - ③不登校の小学生に対し、個別にアクセサリーの作成方法を教える場を設定することにより、リラックスして相手に分かるように説明することができ、得意なことを通じてコミュニケーションを図る練習の機会になる。相手の小学生にとっては、学校以外の知り合いができる。

○SSWは、当該生徒の特技が作品を通して周囲に認知され自信となるよう、地域の社会資源とつないだ。

○学級担任と連携を図り、当該生徒を捉え、学校へ繋げる機会を生み出した。

5 関係機関との連携

- 地域で開催した作品展に学校の教職員が参観したことは、当該生徒にとって大きな喜びとなった。学校と関係機関の情報交換や連携が図られたことにより実現できた。その後、文化祭の演劇で使用するアクセサリーの作成を当該生徒が担当する機会を設定した。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

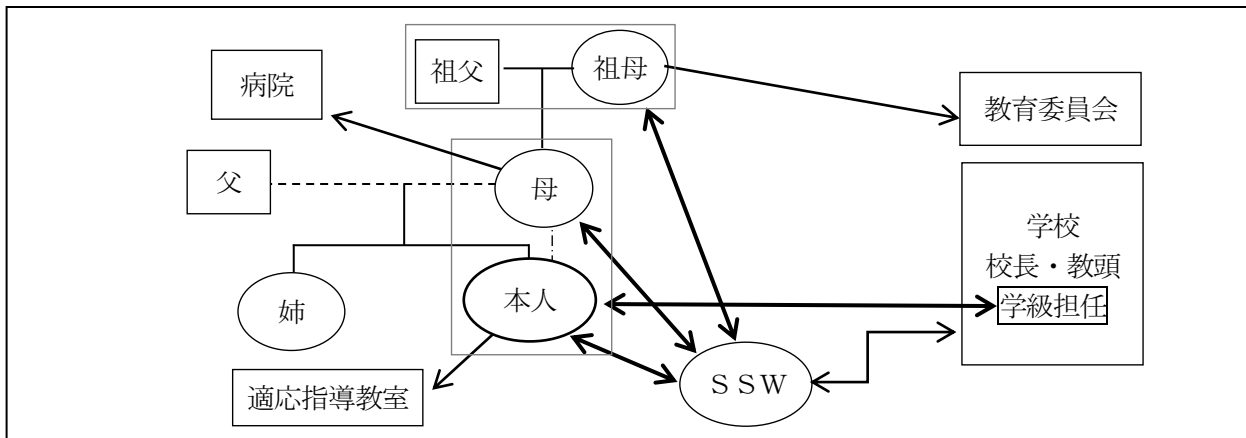
<成果>

- 作品展開催後に創作意欲が高まり、作品を見た人や地域の運営団体から注文が入るようになり、他者の希望に応え感謝される経験から自分にもできるという自信が湧いた。○学級担任が、当該生徒の特技に注目したことにより、学校との距離が近付いた。文化祭で使用する小道具に自身の作品を提供することで、行事への参加を実感することができた。
- 現在は、デザインへの興味が高まり、関連する専門学校への進学に向けて勉強することについて前向きに考え始めている。

<課題>

- 支援員とマンツーマンで勉強することを躊躇しているため、学習が進んでいない。
- 登校に対する抵抗感があるため、中学校第3学年への進級時を登校へのよい機会として捉え、対応する必要がある。

友人関係や母親の精神疾患が理由の不登校生徒と、 学校や適応指導教室とのつながりをサポートしたケース



1 気になる状況

- 中学校第1学年の2学期から、友人関係や進学・学習に関する悩みを理由に不登校となった。
- 母親が精神疾患をもっており、その日の病状によって登校を阻むことがあった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒が小学生の時に両親が離婚し、姉は就職と同時に一人暮らしを始めたため、現在は母と二人で暮らしている。
- 第1学年の2学期以降、学校で仲のよい友人と一緒にいたい、違う生徒が邪魔に入り友人を連れて行ってしまい、上手く入っていけないという理由から、欠席が多くなった。
- 第2学年進級時の学級編成で仲のよい友人と一緒にの学級になったが、仲を邪魔する生徒も一緒のクラスだったことや、同じ部活の生徒が多かったことにより、学級に入りづらくなった。
- 母親は精神疾患を抱え、通院している。病状が悪化すると自宅にこもり何もできなかつたり、当該生徒の登校や学校との連絡を阻んだりした
- 母親自身が中学生の時、不登校で学校との繋がりがなくなった経験があることから、学校に対して不信感をもっており、連絡や家庭訪問等を拒む傾向がある。また、当該生徒には自分と同じ思いをさせたくないという焦りから、無理矢理学校に行かせようとして頻りに喧嘩になる。
- 当該生徒が登校しない日は、母親が仕事に行く際、近隣に住んでいる母親方の祖父母宅に当該生徒を預けている。祖父母宅では主にゲームをして過ごしている。
- 仲のよい友人（不登校傾向）が登校する日に合わせて、月に3日程度、登校するようになった。登校後は、個室で自習し、給食前には祖父母宅に帰宅している。SSWが来校時には、必ず相談に来室している。
- 第1学年の時の学級担任と折り合いがつかず、第2学年で学級担任が交代したものの、教職員への不信感から心を開いていない。

(2) 学校との情報共有の状況

- 週に1度、当該学校を訪問した際、教頭、学級担任と情報を共有し、対応策を検討している。
- SSWが来校時に当該生徒と教育相談を行ったり、家庭訪問をして母親や祖母と面談したりし、その情報を学校と共有している。

3 ケース会議の状況

- 構成員：管理職、学年主任、学級担任、適応教室指導員、SSW、学校教育相談員
- 内容（1回実施）
 - ・当該生徒や母親の状況、今後の対応について協議した。

4 プランニング

- 当該生徒、母親、祖母が安心して登校させられるよう、SSWが学校を訪問する日を知らせ、相談の機会をつくとともに、SSWと当該生徒、母親、祖母とがいつでも連絡が取れる体制を整えるようにする。
- 母親の病状が悪化すると、当該生徒との連絡が全く取れないため、祖母に当該生徒宅を訪問してもらい、当該生徒に携帯電話を持たせて、いつでも連絡できるようにするなど、連絡体制を整える。
- 当該生徒が学級担任に心を開いていけるよう、SNSなどで気軽に連絡が取れるようにしたり、登校時に話す機会を増やしたりする。
- 当該生徒が登校した際、当該生徒のニーズに応じて、いつでも友人や教員とコミュニケーションが取れる環境を設定する。
- 高校に進学したいという気持ちを尊重し、学習支援や進路指導など、教頭や学級担任と相談しながら必要なサポートを行う。
- 学校に行く日を自分で決める、学習する内容を自分で考えるなど、自己決定の機会を少しずつ増やし、無理のないペースで取り組ませていく。
- 適応指導教室への通所を勧め、他者とコミュニケーションを取る場をつくとともに、適応指導教室の指導員と連携し、多様な視点から当該生徒の自律を促せるようにする。

- 学級担任に対する不信感を払拭できるよう、当該生徒と学校が携帯電話等で直接連絡ができるよう勧めた。
- 母親との面談時に母親の思いを傾聴し、当該生徒のことを一緒に考えていく姿勢を伝えた。
- 当該生徒が母親のことで気に病むことを少しでも軽減できるよう、祖母が母親を定期的に通院させるよう依頼した。

5 関係機関との連携

- 適応指導教室の指導員と情報共有し、当該生徒や母親、祖母、学校との連携の方策について検討した。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

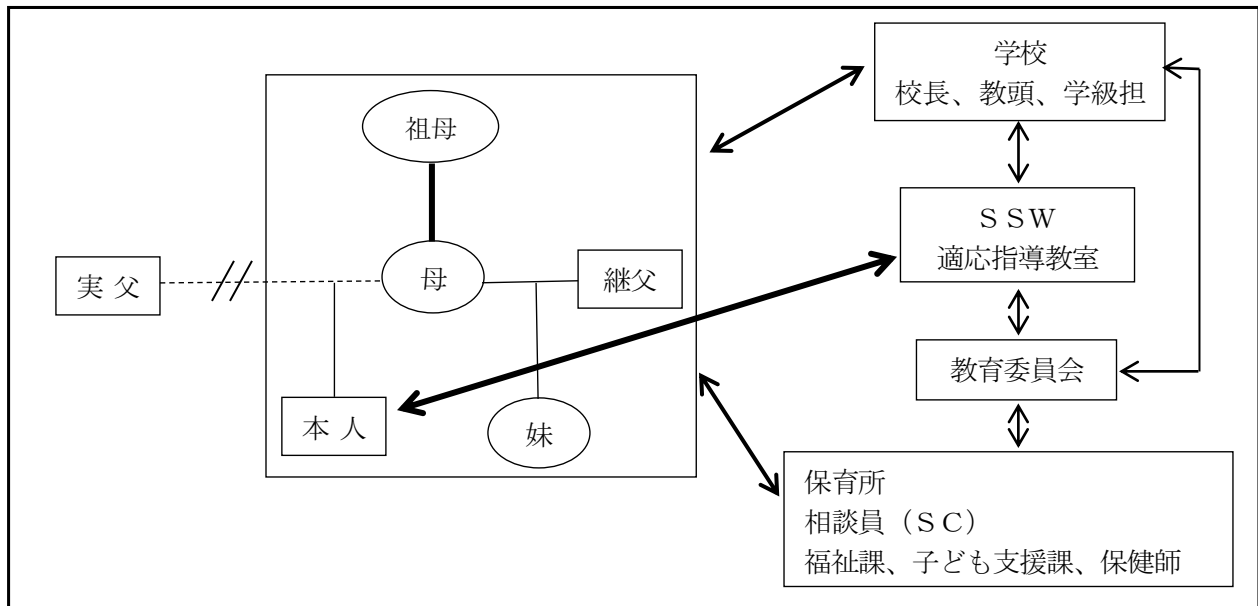
<成果>

- 当該生徒が学級担任と直接連絡できるようになったことにより、学級担任に様々な思いを語るなど、関係性が強くなったとともに、自分で登校日を決めて1人で登校するなど、自己決定し行動する場面が増えてきた。
- SSWとの相談の機会が増えたことにより、気持ちが安定している時間が長くなった。嫌な友人との付き合い方を話すなど、ポジティブな思考が見られるようになった。
- 母親や祖母がSSWと話す機会が増えたことにより、気持ちが安定し、母親が当該生徒の登校を阻んだり、祖母が当該生徒のことを心配して電話をしにくることが少なくなった。
- 適応指導教室に見学に行ったことにより、「高校に行きたい」という思いをもち、学習に対して意欲的に取り組むようになった。

<課題>

- 自分に自信がないことから、友人と一緒に登校できる、適応教室に通えるなど、他者に依存する傾向が見られる。
- 母親の病状に波があることから、祖母と情報を共有しながら、通院を継続させたり、当該生徒に影響が及ばないように留意したりする必要がある。

課題のある家庭環境の不登校生徒を支援したケース



1 気になる状況

- 当該生徒（中学校第1学年）は、小学校第6学年の1学期末から不登校傾向となり、登校しても教室に入ることができず別室で過ごすことが多かった。
- 当該生徒は、両親の影響から1日中ゲームに没頭する日が多く、昼夜の生活が逆転していたことが不登校の原因と考えられる。
- 学校が母親に対して生活改善を求めたが、結果的に学校と距離を置くようになってしまった。
- 適応指導教室に通所することになったが、病弱な祖母や幼い妹の面倒を見なければならないことを理由に休むことが多かった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒は、両親と祖母、妹（保育所）の5人家族で暮らしている。
- 当該生徒は、頭痛や腹痛等の体調不良や不眠を訴えることが多いことから、小学校第6学年の時に病院で診察を受け、起立性調節障害と診断された。
- 小学校第6学年の3学期、当該生徒の担任が同伴して両親と適応指導教室を見学し、通所することになった。
- 両親ともにゲームが好きで、家族で夜中までゲームをしていることが多い。
- 両親とも早朝から仕事に出かけることから、当該生徒が登校しない日は1人で過ごす時間が多く、この時間はほとんどゲームをしている。
- 祖母は病弱で、鬱状態になることがある。

(2) 学校との情報共有の状況

- 当該生徒の適応指導教室での様子について、SSWが学校に伝えている。
- SSWが中心となってケース会議を開催し、学校や関係機関と情報を共有している。

3 ケース会議の状況

- 構成員：小学校管理職、小学校学級担任、中学校管理職、中学校学級担任、相談員（SC）、適応指導教室職員、SSW、保育所職員、教育委員会、役場担当課職員（福祉課、子ども支援課）、保健師
- 内容（2回実施）
 - ・当該生徒及び家庭の状況についての情報共有を図り、今後の対応について協議した。
 - ・家庭へのサポートが必要なケースのため、福祉と教育が連携し支援体制やその方法等を協議した。

4 プランニング

- 当該生徒が適応指導教室への通所を通して、本教室が当該生徒の居場所になるよう努め、学習支援はもとより、生活リズムの立て直しを図る。
- 当該生徒や保護者の意向を踏まえながら、登校機会や時間を配慮し、適応指導教室職員やSSWが学校に同行するなどの支援を行う。
- 学校と連携した登校時の教育相談や家庭訪問を通して、当該生徒の思いや悩みを把握し、支援の方策を検討する。
- 両親とSSWとの面談を定期的実施し、不安の解消と家庭環境の改善を図る。
- 役場担当課や保育所等の関係機関と連携し、母親の支援を行う。

5 関係機関との連携

学校、福祉課・子ども支援課、妹の通う保育所等の関係機関と連携しながら、家庭環境の改善に努めた。

- 適応指導教室と学校が連携し、登校に備えて日常的に情報交換を行った。
- 家庭への継続的な支援を行うため、必要に応じてケース会議を実施するとともに、学校や役場担当課、保育所、保健師等、関係機関との情報の共有を図り、連携した支援を進めた。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

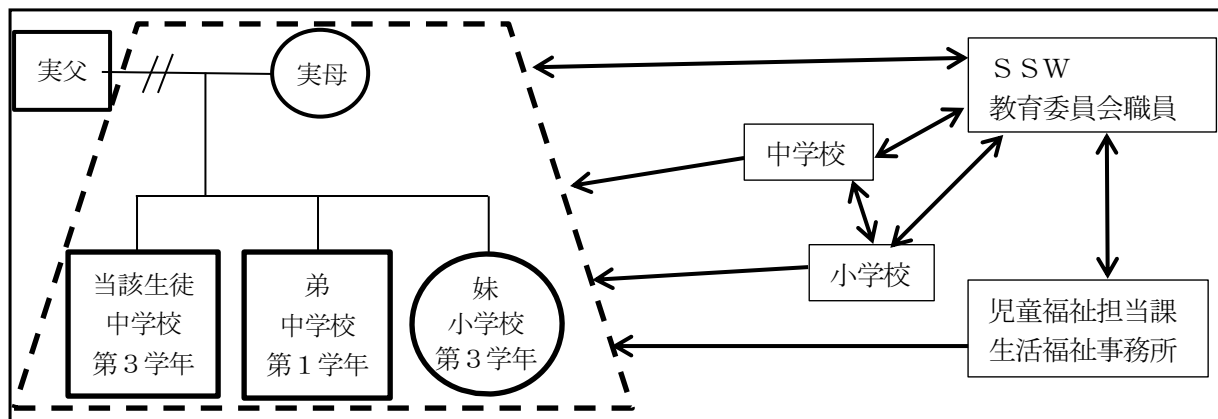
<成果>

- 当該生徒は、学校と適応指導教室とが連携して指導に当たったことにより、高校進学や自らの将来について考えるようになり、意欲的に学習へ取り組むようになってきた。
- 当該生徒は、継続的な通所を評価されたことに対する自信や、SSW、友人との人間関係の構築により、毎日通所できるようになり、月に数回は、給食時間等に登校できるようになった。

<課題>

- 当該生徒は今でもゲーム依存の傾向が強く、時折、頭痛や腹痛等の体調不良や不眠を訴えることから、当該生徒だけでなく両親も含め、関係機関と連携した家庭環境の改善が必要である。

生徒の健康上の問題と家庭の養育上の問題が重複している不登校のケース



1 気になる状況

- 当該生徒は中学校第1学年の秋ごろから朝起きられないことが多くなり、学校を休みがちになった。
- 中学校第2学年になり、当該生徒は遅刻して登校することを嫌がり、欠席するかまたは放課後に母親と週に2回程度登校するようになった。
- 当該生徒は病院を受診し、起立性調節障害の診断を受け、定期的に通院している（血圧を上げる薬、頭痛薬が処方されている）。
- 学校では、当該生徒の不登校の要因は家庭環境が落ち着かなく、母親の関わりも不十分であることだと考えている。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 母親及び家庭の状況
 - ・母子家庭で、生活保護を受給している。
 - ・母親は体調不良を理由に就労していない。
 - ・弟と妹は衛生面や生活リズムに問題があり、学校が母親に繰り返し話をしているが、改善が図られない。
 - ・関係機関の担当者が家庭訪問を行った際、家の中が乱雑で不衛生な状況であった。
 - ・弟と母親がもめている声を聴いた近隣からの通告により、児童福祉担当課が家庭を訪問し、家庭生活や養育の支援を受けることを提案したが、母親は断った。
- 当該生徒の状況
 - ・当該生徒は運動部に所属しており、学習の遅れはない。
 - ・放課後に登校する際は、母親が同行している。
 - ・最近では放課後に登校することを渋るようになった。クラスになじめなくなっていることなどを母親に話している。
 - ・家ではインターネットを通じてできた友人とパソコン通信で会話したり、ゲームをしたりしている。

(2) 学校との情報共有の状況

当該生徒が中学校第2学年の時に児童福祉担当課からスクールソーシャルワーカー（以下SSW）に情報提供があり、同時期に中学校から当該生徒の不登校について報告があったため、関係機関から情報収集を行ったのちケース会議により情報を共有した。

3 ケース会議の状況

1回目

- 参加者・・・中学校（教頭、当該生徒の担任）、小学校（教頭、妹の担任）、児童福祉担当課のケースワーカー（以下「CW」）、生活福祉事務所CW、教育委員会職員、SSW
- 内容・・・家庭や生徒児童の現状、これまでの指導・支援についての情報共有
関係機関の今後の対応について協議

2回目

- 参加者・・・小学校（校長、教頭、担任、特別支援担当教諭）中学校（教頭、担任、特別支援担当教諭）児童福祉担当課CW、生活福祉事務所CW、教育委員会職員、SSW
- 内容・・・各機関のこれまでの指導・支援についてのアセスメント
当該生徒の弟の進級にかかる情報共有
今後の支援にかかる具体的方法の検討

4 プランニング

- 小学校・・・当該生徒の妹が安定して登校できるよう支援するとともに、母親に寄り添って家庭全体への支援が行えるよう中学校及びSSWと情報を共有する。
- 中学校・・・病院と連携し、当該生徒の支援を行うとともに、母親に関係機関の支援について提案する。SSWや小学校と随時情報を共有する。
- SSW・・・子育ての苦労に対する共感や頑張っている母親への励ましなどを基本姿勢として、母親との信頼関係を構築し、具体的な支援につなげる。

5 関係機関との連携

- 生活福祉事務所
当該生徒の通院歴や、母親の医療要否検討の情報等、SSWや学校に対して、適宜情報を提供する。
- 児童福祉担当課
母親が福祉的な支援を受け入れない状況であるため、家庭環境の改善に向けて、家庭訪問等の関わりを継続するとともに、SSWや学校に適宜情報を提供する。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- SSWが母親との数回の面談で、母親の苦労や頑張っていることに共感し、寄り添いながらアプローチしたことにより、母親が少しずつ当該生徒の不登校や進路について相談するようになった。
- SSWが母親との信頼関係を構築しはじめたことにより、当該生徒とSSW及び教育委員会職員との面談につなげることができた。
- 面談の際、当該生徒に適応指導教室の活用について助言したことにより、当該生徒は適応指導教室に関心をもち、自分の意思で見学を行った。
- SSWと当該生徒及び母親との間に信頼関係が構築されつつあり、母親や当該生徒からの相談も多くなってきた。

<課題>

- 当該生徒の不登校については、起立性調節障害による体調不良以外の要素も考えられることから、通級が定着するか、引き続き情報収集が必要である。
- 家庭内の生活リズムや、衛生面等の環境に関する問題については、今後、母親が支援を受け入れてくれるよう対応することが必要である。
- 当該生徒の母親は、学校が当該生徒の不登校の要因を家庭の生活リズムの乱れであると考えていることに対して納得できず、学校と信頼関係を構築するに至っていない。